

# 風景をまとう

—雪国において、自ら生活を獲得していくアドホックな暮らしの提案—

## 01 Concept：風景と調和する暮らし



私たちは、安定や利便性が確保された都市で暮らす中で、いつしかその土地に住まうことの意義を忘れてしまった。他者から安心・安全が与えられる都市居住から離れた田舎での暮らしの豊かさは、「自らその土地と呼吸しながら、生活を拡げ、獲得していくこと」にあるのではないかと。

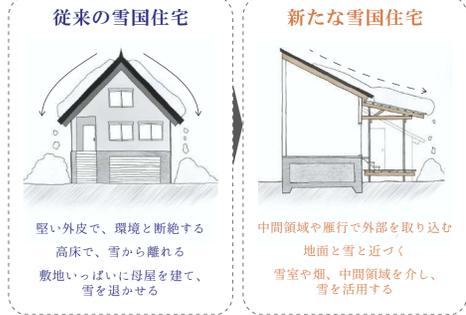
## 02 Site：長野県信濃町古海

長野県の北端に位置し、「野尻湖と北信五岳、棚田」に囲まれた高原の町。気温の年較差、日較差が大きく、冬期は時に-15℃を下回り、月降雪量は2mを超えることから、「特別豪雪地帯」に指定されている日本有数の積雪地帯である。信濃町の北端に位置する古海地区は、町の中でも移住者の多い地域である。



## 03 Proposal：雪国と調和する住まい

従来の雪国の住まいや暮らしは、過酷な環境に対して、堅く閉じこもり、外界を遠ざけるような形式だった。雪を始めとした厳しくもありながら、移ろう四季といった様々な表情を見せる環境から避けながら過ごすのではなく、寧ろ暮らしを彩る要素として享受するために、「中間領域」を積極的に取り入れ、その土地の資源や移り変わりと共に生きていく住まいを提案する。



## 04 Diagram：風景をまとうための設え

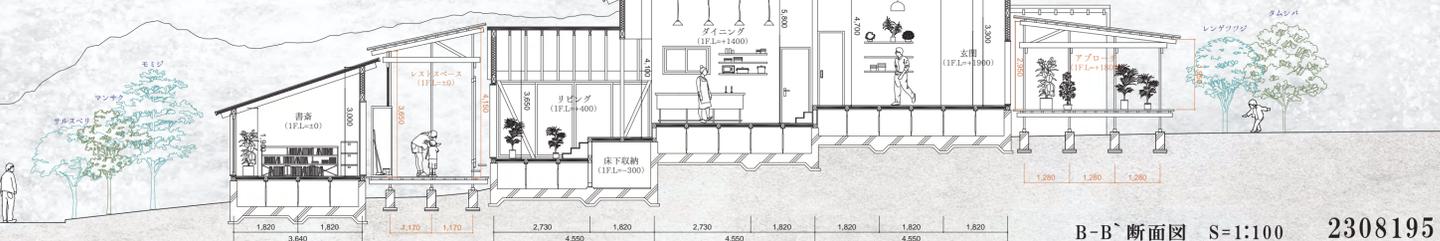
雪国には、「雪囲い」のような、人には制御することのできない自然の変化に対処するためのアドホックな設えがある。それは、その土地や風景に〈呼吸〉しながら生きていくこととする意識の現れである。



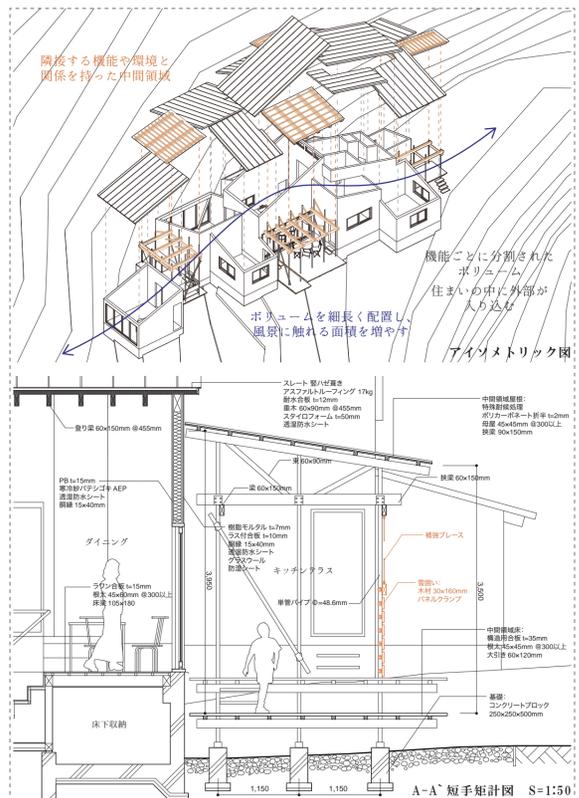
## 06 住み手

父(39) 母(37) 息子(5) 娘(11) 息子(7)

建主である父は信濃町の古海出身。古い田舎の傍に住まうこと、仕事のテレワーク化、家族と共に自然や土地に寄り添って暮らしたい願いが重なり、故郷への移住を決断。



## 05 Structure：住居構成〈過酷な環境に開く〉



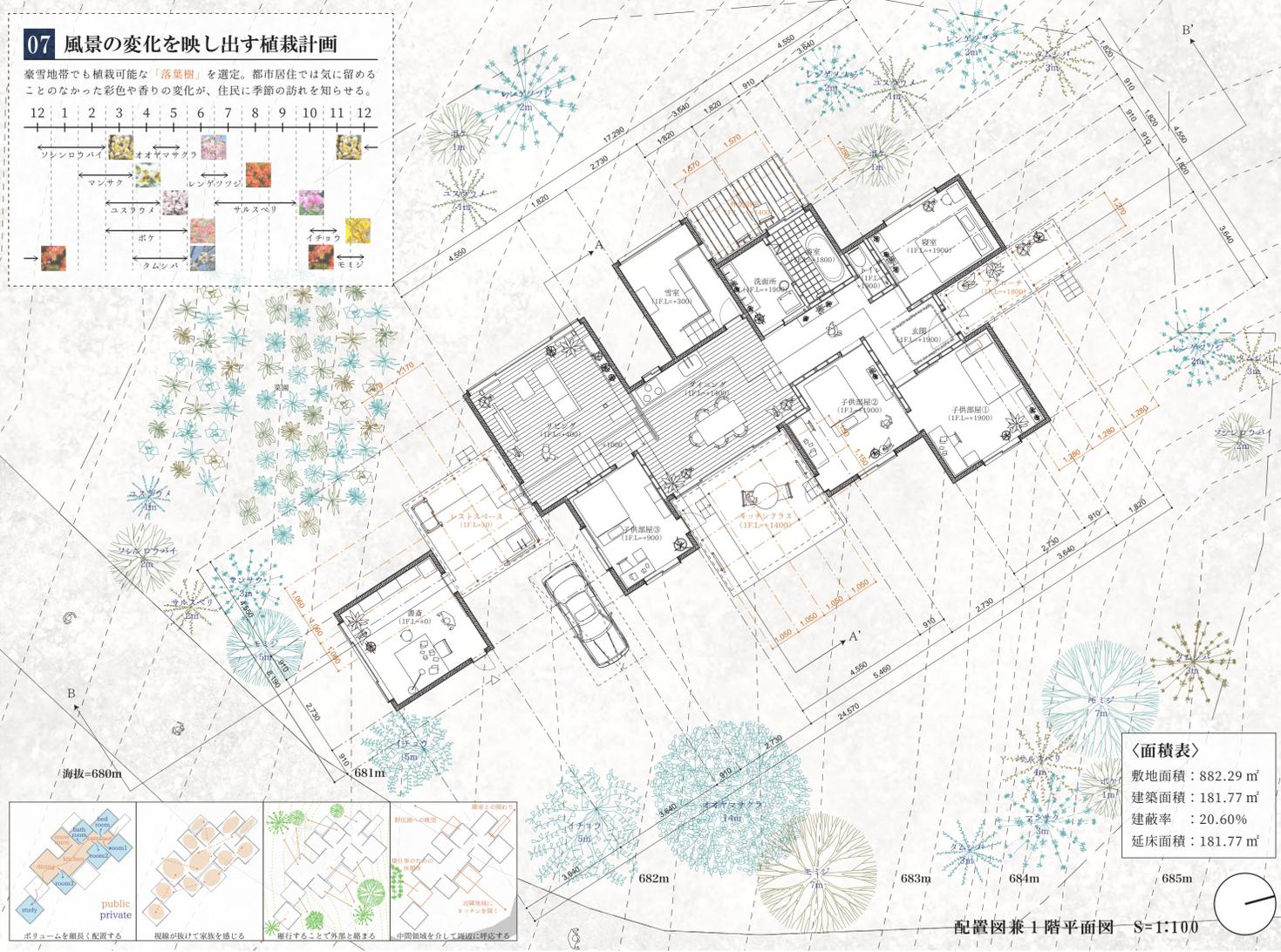
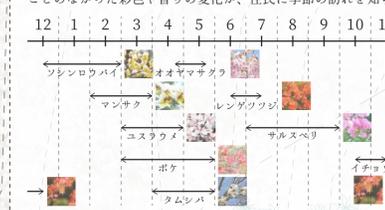
野尻湖と斑尾山を望む。外気浴室には、断熱のため、ビニルカーテンが設えられ、住まいは風景の変化と呼応する。



ダイニングからキッチンテラスを望む。設けられた中間領域に生活が広がっていき、移りゆく風景と共に暮らす。

## 07 風景の変化を映し出す植栽計画

豪雪地帯でも植栽可能な「落葉樹」を選定。都市居住では気に留めることなかった彩色や香りの変化が、住民に季節の訪れを知らせる。



## 08 移り変わる風景と共に生きていく住まい



涼しく明け間の多い季節、横巻で雪の吹き付ける季節、多様に変化する季節と調和しながら暮らす。そこで暮れる暮らしは、時間を設備によって快適性を確保してきた都市とは異なる。より人間的に生き生きとした暮らしなのでないか。